

有明海の漁業の現状と多様な魚類からなる豊かな生態系を紐解く

山口敦子(長崎大学水産学部)

有明海は4つの県に面した九州最大の閉鎖性内湾で、湾奥部には最大6mにも達する大きな潮位差と相まって日本の約41%に相当する広大な干潟が広がる。一転して湾口部は、岩礁域も発達した急峻な地形で潮の流れが速く、最深部は165mを越える。日本で有明海にしかない固有の生物が生息し、かつては宝の海と呼ばれていたが、近年では魚類の漁獲量は激減している。一方で、エイ類の増加が疑われ、二枚貝への捕食圧の高まりが懸念されるようになると、魚類を含む生態系を基盤にした海域再生の必要性を強く感じるようになった。2002年に特別措置法が施行されて以降、様々な再生事業が行われてきたが、未だ再生の兆しはない。講演では、演者が2001年に開始した研究により紐解いてきた有明海の漁業の現状と、サメやエイなど高次捕食者をはじめ多様な魚類からなる豊かな生態系の一端を紹介したい。

